5 ほ場整備とむらの景観の一大変化 …宇曽川流域

○旧秦荘町（現愛荘町）のほ場整備

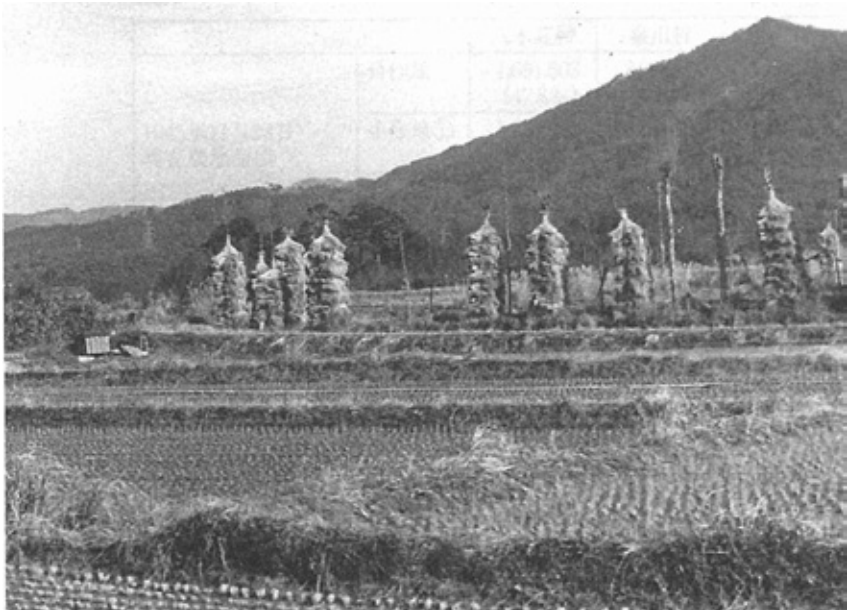
昭和30年代後半以降に推し進められた「ほ場整備」事業は、地域の営農環境、生活環境、農村景観を一新するものでした。ここでは、秦荘町の史誌や集落誌を参考に、ほ場整備が当時の人々に与えた影響を見ていきます。

◆昭和の条里制

『秦荘の歴史』をみると、『ほ場整備事業を「有史以来の大改革」（『元持今昔誌』）と呼んだり、「昭和の条里制」（『栗田史』）に例えたりするなど、（中略）変化を直接体験した住民たちの実感からすれば、まさに「現代のほ場整備」は「古代の条里制」に比すべき大改革であったといえよう（※1）』とあります。

※引用1『秦荘の歴史 第3巻 近代・現代』p.460-461

▲ほ場整備による景観の変化［『秦荘の歴史』より転載］



▲昭和30年代の田園風景（愛荘町）［『秦荘の歴史』より転載］

◆秦荘町のほ場整備

ほ場整備の主な事業内容は、次のようなものでした。

- 区画整理･･･数アール程度の零細で不整形なほ場を、トラクターなどの農業機械が稼動できる30a（標準は30m×100m）の大規模な長方形の区画に変更する。
- 農道整備･･･荷車を基準にしていた細く曲がりくねった農道を、自動車と農業機械が対向可能な幅員4mに拡幅し、整形されたほ場に即して真っすぐに付け替える。
- 水路整備･･･用排兼用だった水路を、用水と排水に分離し、水質を確保するとともに、ほ場ごとに独立した水利用を可能にする。

秦荘町では、さらに、農業構造改善事業を導入して、主に以下の生活道路等の整備も併せて行いました。

- 他町村との連絡のために、幅員7mの道路を町の縦横に1本ずつ付けた。
- 防災上の観点から、各集落の消防ポンプが円滑に機能するよう集落周辺に道路を設置するとともに、消防署の前の道路幅員を大きくした。

このように、「ほ場整備」のみならず、種々の関連事業が併せて実施され、秦荘の営農・生活環境は一新しました。

○ほ場整備による景観変化

次に、ほ場整備によってもたらされた景観の変化について、住民たちの実感を紹介していきます。

◆畦畔木

ほ場整備前は、あぜ道に畦畔木が植えられていましたが、ほ場整備を機に伐採されました。

農家にとって最も新鮮に映ったのは、隣村まで視界を遮るものがなくなり、見通しがよくなったことでしょう。それは、慣れ親しんだ過去の風景が変貌する寂しさとともに、新時代の期待を抱かせるものでした。

※以下引用2 『秦荘の歴史 第3巻 近代・現代』p.462-464

「夢に描いたような便利になったほ場を見て喜びの反面、ほんの一抹の淋しさがありませんか。それは工事によって姿を消した畦畔の樹木です。稲架「ハサ」を結うための樹木であったが今では目加田で絶滅寸前の樹木もありましょう。サンチン、ハリの木、センダン、ウルシ、また私達を今日まで育ててくれた目加田柿の樹木があげられます。何とか保存して行きたい思いで一杯です『目加田誌』」

「思い返せば、畦畔の両側には樹木が植えられ、田んぼは大小様々、道はデコポコ『目加田誌』」

「畦畔には樹木がそびえ、細い道に狭い橋、ハサ掛けなど懐かしい田園風景『目加田誌』」

「幾枚にも分筆され、曲がりくねった狭い野道（中略）視野をさえぎる畦畔木の群れの環境の中で耕作していた時代『目加田誌』」

▲昭和 30 年代の農道（愛荘町）[『秦荘の歴史』より転載]

「村内にはいくつもの溜め池が点在し、田のほとりに畦畔木の藁積みが立ち並び、そこここに竹藪や雑木林がたたずんで、農村集落の原風景をなしていた。ところが圃場整備が進むと、そうしたなじみ深い景物が閘門（水量調節の堰）や整備圃場に場所を譲って姿を消し、私たちが先祖から受け継いできたものとは異質の存在に入れ替わっていく。五ノ谷川の堤に立って遥か彼方を見渡せば、東に元持、北に宇曽川の林を背にした沖、西に栗田の集落と、この辺りにしては珍しく清々しい平野が望み見える。それまで木の間がくれになっていた隣り字が日を追ってクッキリ浮かび上がってくる情景は、私ども住民に何者にも代えがたい感動と期待を覚えさせるものだった。『竹原誌』」

▲ほ場整備後の農作業（愛荘町）
[『秦荘の歴史』より転載]

◆道路の整備

道路が拡幅され、また、直線化されたことで、自動車が楽に走ることが可能となり、移動時間が短縮されました。農家にとって、隣村までの見通しがよくなったことも相まって、集落が非常に近くに感じられたことでしょう。

※以下引用2 『秦荘の歴史 第3巻 近代・現代』p.462-464

「昔から地形は高低・複雑な農道、変形な区画の耕地等々。今は立ち木も無く日当りが良く、危険な野良池も埋められ、農道・水路は整備され美しい環境田園風景となりました。『目加田誌』」

「農道　てくてくと　歩いた野良道　何処へやら　リズムも軽く　自動車走る『目加田誌』」

「四方木の田んぼへ大八車を引っ張って行くだけが小一時間かかったが今では軽トラで二～三分『目加田誌』」

（参考）
秦荘町史編集委員会編 (2008)『秦荘の歴史 第 3 巻 近代・現代』p.456-464, 愛荘町